



(1)



(2)



(3)

さまざまな方面から
 発せられる情報。
 商品、サービス、店舗、
 施設、本、テレビ番組……。
 人々の暮らしの流れは
 どうなっている？
 編集者と建築の研究者が
 月替わりで考察します。

perspectives:lifestyle

衰退した商店街に元気を取り戻すことはできるのか。今回は、この難問に挑む学生たちの活動を紹介した。

場所は、神戸市兵庫区の西出町と東出町。戦前から造船業で栄えたが、戦後は次第に衰退し、阪神大震災の影響でさらに寂しくなった。現在は高齢化が進み、空地や空家そして空店舗が目立っている。

この地区で、私の勤める神戸芸術工科大学の学生たちが、「住みコミュニケーションプロジェクト」という活動を2003年の秋から展開している。

略して「住みコミ」。文字通り「住み込んで」「コミュニケーション」をつくりだす。稲荷市場という商店街に面する空店舗などを、低家賃で、しかも改装を前提に借り、そこに住む。そのかわり、地域の人々と連携した町づくり活動などを通して恩返しをするというシステムだ。住み手は「住

みコミスト」と呼ばれている。

最初に学生たちは、稲荷市場に面する建物を借り、1階を彼らの事務局に、2階を住居へと改装した。事務局は、町の大人と子供のたまり場になった。そこを拠点に情報発信を続け、現在はプロジェクトに共感した8名ほどの若者が、町のあちこちの建物を改装して住んでいる。

学生たちは、日々の暮らしや改装工事を通して町の人々と交流を深めるだけでなく、2004年と2005年には、稲荷市場を舞台にした芸術祭を、地域との見事な連携のもとに成功させた。

「住みコミ」が実現した背景には、学生たちと地域との長い前史がある。

発端は、2001年につくられた西出町の歴史資料館「まちなか倶楽部」。この建物の建設工事に、地域の人々と本学の学生たちがボランティアで参加した。それが縁で、学生たちと地

域との長いつき合いが始まった。翌2002年には、この町の長屋や路地や工場などに魅力を感じた学生たちが、そういった空間を舞台にした4日間の「まちのリズム 場所のリズム」というアートイベントを実現させた。

さらに2003年には、まちづくり

いずれの活動も主役は学生。大学や教員はサポート役だ。活動を授業の一部に組み入れて、より多くの学生に参加の機会を与えたり、成果を論文等にまとめるよう指導して、情報の蓄積を図っている。

若者たちは実に慎重に、しか



(4)

住みコミストに託す
 下町の未来
 文・写真=花田佳明
 (神戸芸術工科大学教授)



(5)

協議会からの依頼を受け、「入江町工場マップ」を制作した。「入江」とは、隣接する中央区東川崎町を合わせた地域名で、学生たちは、そこに潜む造船関係の歴史や空間や人の魅力を発掘した。

も羨ましいほどの軽やかさで町や人に溶け込んでいく。その姿の中にこそ、町づくりの新しい可能性が潜んでいる。私は、「住みコミスト」たちの活動の継承と展開を、大いなる期待を込めて注目している。

(注)住みコミュニケーションプロジェクトのホームページは www.sumicomi.com/。活動の詳細が楽しく紹介されている。ぜひアクセスしてほしい。



(6)

(1) 稲荷市場に面した「住みコミ」事務局。2階は住居だ。地下室があったので「チカちゃんハウス」と呼ばれている。
 (2) 稲荷芸術祭で町の新しいお稲荷さんを作る住みコミストと学生たち。(3) 稲荷市場の味わい深い入り口。



(7)

(4) 住民と学生が建設工事に参加した「まちなか倶楽部」。(5) 現在改装工事中の物件。(6) 稲荷市場の様子。シャッターの降りた店も多い。(7) 雲間気のある路地。(8) 近くにある造船所。



(8)